

公葬というメディアー招魂社をめぐる一考察ー

井上佳子

The media of public funerals: A study on Shokonsha in Kumamoto

Keiko INOUE

851-2195 長崎県西彼杵郡長与町まなび野 1-1-1

長崎県立大学 国際社会学部 国際社会学科

Department of Global and Media Studies, University of Nagasaki,

1-1-1, Manabino, Nagayo-cho, Nishisonogi-gun, Nagasaki Prefecture 851-2195, Japan; inoue28@sun.ac.jp

神道を国教化する政策を進めた明治政府は、全国に招魂社を組織し、戦没者の慰霊を行った。日本が対外的に戦争を繰り返す中、祭神は急増し、毎年の招魂祭が盛大に開催された。筆者の祖父、井上富廣は日中戦争で戦死しているが、残した日記には、招魂祭の開催準備で賃労働をしたことや、奉納行事を楽しんだことが記されている。富廣との関わりの深い熊本の招魂社が総力戦に与えた影響について考察する。

キーワード：戦争、招魂社、メディア

1. はじめに

筆者の祖父、井上富廣は1938年（昭和13）年7月、日中戦争で戦死している。1938（昭和13）年10月6日、故郷の藤富村では富廣の村葬が行われている。筆者は、2021年度の長崎県立大学国際社会学科の研究紀要で、富廣の村葬の行政資料や、この村葬を知る人の証言などをもとに、この村葬が、地域の人たちにどのような影響を及ぼしたかを考察した。そして村葬など、これら各市町村単位で行われた公葬が、当時の総力戦に少なからぬ影響を及ぼしたことを述べた。

これらとは別に、国は全国に招魂社（のちの護国神社）を組織、戦死者を神として祀り、盛大な慰霊祭、招魂祭を行った。今回は、近代天皇制国家を支えた招魂社（のちの護国神社）に焦点を当てたい。

日本が戦争に突き進む中、戦死者の増加に伴い招魂社の祭神は急激に増えていった。招魂祭では慰霊祭の傍らで、競馬やサーカスなどの奉納行事も行われ、たくさんの人たちで賑わった。

筆者の手元には、富廣が残した日記がある。徴兵される前の昭和1930（昭和5）、1932（昭和7）、1933（昭和8）、1934（昭和9）の日記。そして応召され中国に渡り戦死するまでの1937（昭和12）、1938（昭和13）

年の日記である。

1932年の日記では、富廣が招魂祭を開催する準備で賃労働をしたことが記されており、1930年、33年、34年は、招魂祭を訪れ、そこで開催される娯楽を楽しんだことが記されている。

ここでは、井上富廣とも密接に関わった熊本の招魂社が総力戦に与えた影響について考察したい。今回は、熊本の招魂社をめぐるいくつかの新聞記事や論考、富廣の日記を提示し概観するところまでとなった。小稿を今後の考察の第一歩としたいと考えている。

2. 招魂社と国家神道

2.1 熊本の招魂社

明治政府は、初年から神道を国教化する政策をすすめた。神社神道は、天皇を現人神とし、天皇崇拜を強制するものだった。

1869（明治2）年、明治維新で殉職した死者を祀るため、東京、九段坂上に東京招魂社がつけられた。

東京招魂社に続き、全国でも、幕末の「忠臣」を祀る慰霊

の場、招魂場がつくられていったが、明治政府の神道国教化政策によって、これらは天皇とゆかりの深い伊勢神宮のもとに、招魂社として再編成されていく。日清戦争、日露戦争、その後の日中戦争や、それに続く太平洋戦争で戦死者は増え続けたが、招魂社は、戦死者を顕彰して遺族の誇りとし、国民の戦争継続の士気を高める役割を果たした。1939（昭和14）年、全国の招魂社は、護国神社と名を変える。

1869（明治2）年2月、熊本市の花岡山に、幕末期の攘夷運動家で、池田屋事件で死亡した熊本藩士、宮部鼎蔵ら、150人の霊を慰めるため祠宇が建てられた。これが熊本の招魂社の起源である。

1874（明治7）年3月には官祭招魂社となり、修繕や祭祀の費用一切を国が負担することとなった。

その後、花岡山が手狭になり、花岡山招魂社の祭礼と同時に、熊本城南方の六師団山崎練兵場で、1900（明治33）年からは、移転先の渡鹿練兵場で招魂祭が開催されるようになった。

1909（明治42）年、熊本城内の藤崎台の一角に社殿がつくられ、昭和の初めに改築された。ここで終戦まで、毎年5月に、県民あげての招魂祭が開催された。

1939（昭和14）年、全国の招魂社は護国神社となり、護国神社は靖国神社の分社と位置付けられた。熊本でも護国神社を新たに造営することになり、熊本市北部の立田山山麓に土地を求め、住民の手によって整地されたが、戦局が悪化し造営は中止された。

戦後、1951（昭和26）年のサンフランシスコ平和条約締結後、護国神社造営の機運が再び高まり、1958（昭和33）年に、招魂社のあった藤崎台に神殿が完成、戦後初めての招魂祭が開催された。

2. メディアとしての招魂祭

2.1 花岡山招魂祭

1878（明治11）年3月の熊本新聞は、花岡山で招魂祭が行われたことを伝えている。官祭招魂社となり4年目である。この日の新聞は相撲の興行があったことを伝えているが、招魂場はもともと地域に根差しており、そこで行われる招魂祭は人々の娯楽と結びついていた。

「去る十三日は花岡山招魂社に於て例年の通り祭典の執行あり。其傍ら別に一社堰を設置せられ、安岡故令公、小関故大書記官を始め、一昨秋の暴動と客春の攪乱に非命の死を遂げし人々の霊祭をも施行ありて、富岡権令公を始め県属官員は残らず参詣せられ、神官出席して献具・祭文等式の如

く執り行ひたり。此日は角力等の興行もあり、天気も好く、四方山も霞み渡りて春の気色も一としほ長閑なれば、参詣人や見物人も多く出掛まして、花岡山の賑合は謂も更なり」（熊本新聞 明治11年3月16日）

2.2 臨時招魂祭

1894（明治27）年7月に始まった日清戦争は、翌1895（明治28）年4月に終結している。全国で1万3千人、熊本では298人の戦死者が出ている。九州日日新聞は、戦死者を慰霊する臨時の招魂祭が営まれたことを伝えている。

「日清戦後戦死病没者、二千三百余名の為に催ふせる臨時大招魂祭は予記の如く、昨日より山崎練兵場に於て執行せられたり。今其式場に於ける概況を記せば、当日の祭式は予て定められたる如く、前号所載の神祭式次第に依りて午前九時執行せられ、先づ手水の儀より祝詞奉誦、神饌供奉、主任神職祝詞、神職総代、各教会長の祭文等あり、次に遺族・師団・県庁各祭催員・文武高等官・篤志奉納者・赤十字社員順次拝殿に於て拝礼を了え、其れより神業・榊の舞・巫女の舞ありて一同幄舎に復し、遺族を初め懇篤なる饗座あり。正午全く式を終り、其れより一般の参拝を許せり。師団各隊及び第五高等学校・尋常師範学校・尋常中学済々黌・熊本高等小学校・市内各尋常小学校生徒は、式中に於て孰れも鳥居前に於て順次隊列を整へ厳肅の中に参拝を了したり。而して祭式場の内外に於ける粧飾は例年五月の招魂祭に於けるが如く、大小の旗幟数百旒提灯数千箇其他全ての粧飾格別異なる処なきも、唯其の注意されしは規模の大にして、総ての準備最も町重なりしことなり。夫れより該式場を転じて余興の場に至れば、競馬・犬追物・撃剣・花火・能楽・角力・見世物・造物・音楽隊の奏楽・俄手踊・戦利品の展覧各々その技を競ひ、其の雄を争ひ、其の雄を角し、其の趣を極め、奇絶快絶・壮絶筆紙に及び難し。又全市街の各町廻りより、師団城内及び宮内を徘徊して、諸種の見物を為す者は陸続接踵最も雑踏を極めたり」

（九州日日新聞 明治29年1月31日）

記事には「祭式場の内外に於ける粧飾は例年五月の招魂祭に於けるが如く、大小の旗幟数百旒提灯数千箇其他全ての粧飾格別異なる処なきも、唯其の注意されしは規模の大にして、総ての準備最も町重なりしことなり」とあり、日清戦争後の臨時の招魂祭が、一年に一度の招魂祭と同じように盛大に行われたことがわかる。

また多くの余興が奉納され、たくさんの人で賑わったことを記事は伝えている。「戦利品の展覧各々その技を競ひ、其の雄を争ひ、其の雄を角し、其の趣を極め、奇絶快絶・壮絶筆紙に及び難し。又全市街の各町廻りより、師団城内及び

宮内を徘徊して、諸種の見物を為す者は陸続接踵最も雑踏を極めたり」とあり、戦争に勝利し、世の中が高揚している様子が伝わる。

2.3 招魂祭をオリンピックとする

日清戦争、日露戦争で、日本は多くの戦死者を出した。日清戦争1万3千人、日露戦争8万4千人である。熊本県内の戦死者は、日清戦争が298人、日露戦争が1666人となっている。国にとっては、国民の戦意維持のため、戦死者を顕彰する神社をつくることは重要だった。日清・日露戦争で、祭神の数は激増、全国の招魂社の数も増えていった。

大きな被害を出した一方で、大国ロシアに勝利したことは、日本に「一等国」であるとの自信を与えた。日本は、欧米列強のような軍備や経済を目指すことになる。

1909（明治42）年5月6日付九州日日新聞の論説「招魂祭をオリンピックとする」からは、その時代の熱狂的な空気が伝わる。

「招魂祭をオリンピックとする 招魂祭は、熊本に於ける、年々の行事中の一大盛事也、神祭佛祭の式典は固より余興としての競馬、花火、俄踊りなど、他に見る可からざる盛況を呈す、本年は、師団の韓国駐屯のため、平年通りの大仕掛けはなけれども、各種の催しました少なからずして、必ずや稀に見るの盛況なるべし。吾人は殉国者の雄魂を吊祭する上よりしても、又熊本の繁栄の為めよりしても、此の盛事あるを悦ぶ。蓋し、年々の招魂祭に詣で、その旌旗空に翻り、歓声地に湧きて、非常の雑踏を為せるを目撃する毎に、吾人は一種の感慨あるを常とせり、そは遺族も、普通の参拝者も、共に嬉々としてこの盛事を悦ぶの色、同殷なるものあればなり、即ち招魂祭は、萬衆の歓喜の中に、最も面白く行わるれば也、何が故に爾く面白く行わるるか、理由なかる可らず。我日本人には、身を国に殉し、命を君に捧ぐるより至大なる名誉と、功勳とは無し、されば、一朝事あるの時には、身上の総ての者を放擲して、只管に君国に盡すが、日本国民の習也、死は人生の最も悲痛なる者、殉国者の父母妻子兄弟に於ては、肉親の情として、洵に耐え難き悲しみあらんも、その悲しみの半面には、又は大いなる誇りと、榮譽となき能はず、されば殉国者の親戚は、區區の私情の為に泣きつつも、公けの為めとして、心から名誉とする誇りの色の、禁じ難き者あるにあらずや、此の情の強きは、取りも直さず、我国の強き所以ならずや、而して招魂祭の光景が、何となく勇ましく、花々しく、又愉快そうにして、その形の空気の、暗々裏に人を刺激する者あるは、是が為ならずや。

此の如く殷盛なる祭事によりて、初めて殉国者の雄魂を慰する事も出来べし、一般の参拝者を感奮隆起せしむることも出来べし、又た遺族の心事を慰藉する事も出来べき也。招

魂祭の賑わいを以て、単に無意味の馬鹿騒ぎの如く思惟するは、表裏に徹透せざるの愚見のみ、招魂祭の盛況は、即ち国民奉公心の反照なるを識らば、此の盛事は大に味わうべき者あり、此の如く観じて招魂祭に意味あり也

吾人は、熊本の市民が、年々招魂祭に対して、盡すととの少なからざるを多とす、されど熊本人の性格は、一体に鎮静に過ぐの如きあれば、斯る場合には、小心は常軌を逸してハズムも面白からずや、俄踊りや、その他各種の催しや、出来得る限り多きが宜し、熊本市のオリンピック祭典として、藤崎神社祭典か、この招魂祭を用いては如何、吾人はこの両日、大にハズミ、大に賑わんことを希望す」

（明治42年5月6日 九州日日新聞）

そして、「本日の招魂祭」として、慰霊祭や余興が紹介されている。

「本日の招魂祭 熊本市中心部の新市街で行われる。6日には、新市街二十三連隊前の斎場で、午前9時から神式で行われ、愛国婦人会が遺族を接待する。翌7日に、延寿寺で仏式の祭式がある。両日とも、雨天決行。花岡山でも祭典が行われる。余興として、運船組の本妙寺一覽、動物会、観戦鉄道、船すべり、熊検番の喜撰法師、西検番の神田祭手踊りなど」

この九州日日新聞の論説は「我日本人には、身を国に殉し、命を君に捧ぐるより至大なる名誉と、功勳とは無し、されば、一朝事あるの時には、身上の総ての者を放擲して、只管に君国に盡すが、日本国民の習也」「その悲しみの半面には、又は大いなる誇りと、榮譽となき能はず、されば殉国者の親戚は區區の私情の為に泣きつつも、公けの為めとして、心から名誉とする誇りの色の、禁じ難き者あるにあらずや、此の情の強きは、取りも直さず、我国の強き所以ならずや」と、戦死は本人にとっても遺族にとっても誇りであると強調している。また更に、「招魂祭の賑わいを以て、単に無意味の馬鹿騒ぎの如く思惟するは、表裏に徹透せざるの愚見のみ、招魂祭の盛況は、即ち国民奉公心の反照なるを識らば、此の盛事は大に味わうべき者あり、此の如く観じて招魂祭に意味あり也」と述べ、この時代の空気を肯定し、強く後押ししている。

2.4 花岡山参道開鑿

1925（大正14）年、招魂社のある花岡山の参道の開鑿工事が行われている。招魂社までの道は急坂、悪路で、整備の必要性が長年叫ばれていた。

この年、在郷軍人会が中心となり、青年団や婦人会、学校など、民間の人たちが無償で協力、ひと月で完成させている。完成後、秩父宮も視察に訪れている。

「花岡山招魂社陸軍墓地参道開鑿記」の緒言には、こう書かれている。

「山上には維新に関係ある勤王志士を祭れる官祭招魂社、及び明治九年神風党事変に斃れたる陸軍将士の墓地、並に同県官の墳墓あり、阿蘇殿松、鏡掛け松の四時の緑濃やかに、春は桜、秋は楡紅葉等、山自体の美観亦乏しからず真に熊本に於ける一勝地として登山者少なからず、然るに其道路たるや、何れの方面よりするも羊腸崎嶇にして、特に登山者の最も多き北岡方面に於ては俗に地獄坂と称する峻坂ありて、攀登容易ならず、多年市民の遺憾とせし所なり。然れど之が道路の開鑿には、巨萬の巨費を要するを以て、従来一二の企画者ありしかども、実現の運びに至らずして今日に及びたり、適々、大正十三年十月、之が開鑿に就き、熊本市より我連合分会に、提議を受くるや、連合分会長は之を分会長会議に諮りしに、国民精神作興の詔書の御趣旨に沿ふ恰好の事業なりとし、満場一致を以て之を可決せり」

「此間市民の同情翕然として集まり、地方有志の斡旋尽力は勿論、軍隊、官衛、学校、青年団、消防組、会社、宗教団体、婦人会、其他各種団体より個人に至る迄、奮てこれに参加し、大に作業を援助し、其の奉仕の総人員は実は一萬を超えて速やかに完成したり、斯くの如きは実に熊本市始めて以来の盛挙と称えらる。」

緒言で、この開鑿事業は「国民精神作興の詔書の御趣旨に沿ふ恰好の事業」とされている。

国民精神作興詔書は、1923（大正12）年11月、大正天皇の名で出されている。熊本市が在郷軍人会に開鑿を持ちかけたのが翌年の10月、工事に着手したのはその三か月後である。

戦争特需に沸いた第一次世界大戦後、その反動で日本を恐慌が襲った。不況と社会不安が広がる中、社会主義運動や労働運動が高まりをみせた。詔書は、これらの運動は「浮華」「軽佻」であるとして、人心のひきしめを図った。

在郷軍人会がまとめた「花岡山参道開鑿記」には、軍隊や役所の他、一般の処女会や婦人会、青年団、学校、宗教団体などが無償で作業に参加したことが記されている。理髪業組合や小学生も参加している。

開鑿記には、各団体ごとの作業の様子を記録した写真も多く掲載されている。期間中、工事を見守る多くの見物人の写真もある。国の政策に人びとは従順だったことが伺える。

「第十一日（2月1日）本参拝道工事は、一般市民に異常なる反響を興へ、連日予想外の、応援申し込み踵を接するの有様にて、殊に本一日は日曜日の上に公休日重りに依り、古町、大江、慶徳の三分会を始め、熊本地方専売局工場分会及び、同乃木講社の婦人会員、鐘紡分会、春竹消防組、横手町中青年会員、歩兵第十三連隊一年現役兵、午後よりは高麗門青年会等、総勢一千名以上の人達が奉仕し、殊に天候も久し振りに恢復し、朝まだきより拭うがごとき快晴にて見物

人ぞろぞろ押懸け、此の日の花岡山は、全く参拝道奉仕デーとも謂うべく、全山人を以て埋まる有様にて非常の緊張ぶりに、人氣益々引き立て、全員の熱心なる努力と、奮闘振とは何れも涙を誘う計りの感激にて、見物人中之れを見て感激の余り、自発的に作業を援助する者少なからず」

「第十二日（2月2日）慶徳小学校上級生六十八名は、富島、木村、岡崎、三訓導引率の下に、来たり加わるあり、一同努力の爲め、工事大に進捗し、土披側溝迄彫り上げ、模範作業を行い、尚ほ時間に余裕ありしを以て、隣接地区の埋土をなし午後一時全部の工事を完成して、小島連合分会長、木村支部長の謝辞、渡辺軍医の挨拶ありて、有志寄贈の清酒、折詰にて、野宴を開き、木村支部長の発声にて、萬歳を三唱して引き揚げたり」

第十六日（2月8日）

「此日特に異彩を放ちしは、八王子処女会の十八歳より二十三歳迄の処女十八名は八王子処女会と書いたる旗を翻し花岡山参拝道八王子処女会の印の入りたる手拭を被り、手抜脚絆にゴム足袋の甲斐甲斐しき扮装にて、土を運び、トロを推し分会員と相伍して、少しの疲労も見せず働きしは嘆賞せぬものこそなかりけれ」

そして、1925（大正14）年3月17日の九州日日新聞は、工事が完成したことを伝えている。

「熊本市在郷軍人会が、青年団・婦人団・官庁・会社・工場・学校・軍隊、其他の各種団体等六十余団体の援助を得、一月十八日起工式を挙げて以来実働日数三十日を費し、延人員一万二十六人の犠牲的奉仕により、二月二十三日工事を終わり、二十四日秩父宮殿下親しくご視察の光栄に浴した。幅三間、延長四百四十間の花岡山招魂社並に陸軍墓地参拝道は、十五日午前十時から山上招魂社広場に於て、北岡神社坂本社司齋主の下に、荘厳なる竣工式を挙行した」

（九州日日新聞 大正14年3月17日）

2.5 井上富廣の日記

筆者の祖父、井上富廣の日記から、招魂社に関わる部分を抜粋する。日記は、1930（昭和5）年、1932（昭和7）年、1933（昭和8）年、1934（昭和9）年である。

この時期は、1931（昭和6）年に満州事変が勃発、その後、日中戦争、太平洋戦争と続く頃である。

新聞は毎回招魂祭を大々的に報じている。記事はどれも、招魂祭が大勢の人たちで賑わったことを伝えている。

「藤崎台を中心に凄まじい人の洪水 第二日の招魂祭」
「不景気とはどこを吹くとばかり、どんちゃんぐあんちゃん騒ぎ」

（九州新聞 昭和5年5月2日）

満州事変勃発からちょうど2年となる1933(昭和8)年9月18日にも招魂社で慰霊祭が行われ、多くの人たちが詰めかけている。

「参列者実に三万余名 沸き起こる愛国至誠の大感激」
(九州日日新聞 昭和8年9月19日)

井上富廣の日記によると、1930(昭和5)年、1932(昭和7)年、1933(昭和8)年、1934(昭和9)年ともに、富廣は毎年招魂祭に出かけている。特に1932年の日記では、富廣が招魂祭を開催する準備で賃労働をしたことが記されている。

「きょうは藤崎台において盛大な招魂祭が施行される。朝からどんよりと曇り降りだしたる雨のためにせっかくの祭りも少し出鼻を折られた様子。雨の中に盛大な神式祭典は施行せられた。1930(昭和5)年4月30日の日記」

「今日は招魂祭第二日目て仏式によって盛大な祭りが行われるのである。今日もまたうるさい雨は降るともなしに降ってきたが見物人はきのうより余程増したようである。人間の極致の妙技に我と我が目を疑った空中サーカスも招魂祭なればこそなり。1930(昭和5)年5月1日の日記」

「招魂祭の日傭に出席。自転車三つ、久方ぶりの懐かしの藤崎台についた。若葉にかおる葉桜の中に包まれし招魂社及び境内には早や明日の準備がほぼ整っている。旗を立てたり遺族の椅子を並べたり忙しい。1932(昭和7)年4月29日の日記」

「招魂祭初日雨降り。昨夜来の風雲急を告げ熊本市民の心を知らず今朝は全くの土砂降りである。暗水着の上より合羽を着るやら傘をさすやら見事な姿で自転車を川尻向かって轟進させた。一行にはくれた僕は漸くのことで追いついた。お何事によらず唯出発点をおくるればなかなか先で追いつかないものだ。十数人からなる自転車隊は森の都さして乗り込んでいく。やがて厳かに神式によって祭典を施行された。降りしきる雨の中に厳然直立不動の姿勢をとって敬礼する軍人。誰か一縷の涙を注がん 1932(昭和7)年4月30日の日記」

「招魂祭第二日。土砂降りの天候も今朝はからりと晴れ爽やかな新天地を求め走った。今日は昨日の祝いを一事に済まさんと目的の雑踏が早朝から色めく。1932(昭和7)年5月1日の日記」

「今日もどうやら職にありつき朗らかな気持ちで道を急いだ。招魂祭第一日雨によって余興延引し故に競馬、自転車などの余興あり。昨日よりも少し人数減じ朝から弁当の棄てがらを掃除した。我自身道徳心はないが、一体日本人は公德

心という観念が乏しいのだ。弁当を食い終わったら一箇所に棄てるようにすれば人の迷惑にもならず人夫の手も省くわけだ。今日もとうとう参詣する人たちが見ゆる。競馬だけはさすが盛況を呈している。買った負けた一戦ごとに血は踊る。喜ぶ人残念がる者。世は春。さまざまである。1932(昭和7)年5月2日の日記」

「軍隊トラックで机椅子を運搬することとした。満載した荷の上で揺れながらあらゆる熊本の風物を眺めつつ走った。十三連隊工兵輜重、おお軍隊の厳律な生活。我もやがて入営するぞ。1932(昭和7)年5月3日の日記」

「建設は難しいが破壊は易いと古人は曰く。げにそのとおりだ。一週間も前から建設にかかりて成立したのが一日でだいぶ片付いた。今までの盛観に比して破壊されて社のなかに鳥居一人毅然とそびえ招魂の額が淋しくかかっているのが一入感慨無量。1932(昭和7)年5月4日の日記」

「久方ぶりに走る森都への大道。初夏の朝風肌におとずれ爽やかな朝景色。東山の千変万化の雲の徂徠。とても朝寝坊の俺には味わい得ない。1933(昭和8)年5月1日の日記」

「常には空きの井手バスも満員超過で鈴なりだ。これはとても乗り切れないと断念して熊本まで歩いた。宮に参拝して忠勇なる兵士の霊を慰め色々の余興を見る。午後は競馬浮世事など見物して夕方人の波にもまれて繁華街へと進出。1934(昭和9)年4月30日の日記」

この昭和9年の賑いを九州新聞が伝えている。「満州事変出動から凱旋第一年目の熊本招魂祭 三十日、連日の降雨も朝まだき祭典場藤崎台招魂社には大小数十旗の五色の旗中天高く薫風に翻り」
「午後に入って人出は一入と増し軽やかな春の装いをこらした老若男女の群れが街から街へペープメントを泳いでいった。満員電車が通り過ぎれば自転車が慌ただしく走っていく。車の洪水と人の流れで街は沸きかえった。みずぬるむ水前寺なども泳ぎ着かれた人、人、人の黒山だ。アイスクリーム屋さんが真っ赤になりながら一銭一銭と売声をあげているかと思うと片方ではアイスキャンデーがとんでいく」
(九州新聞 昭和9年5月1日)

富廣は毎年招魂祭に出かけている。招魂社は身近な存在であり、年に一度の招魂祭は、人々にとって大きな楽しみだったことがわかる。

また、1932(昭和7)年の招魂祭では、軍のトラックに乗り開催の準備をしながら、早く軍隊の一員になりたいという思いを募らせている。招魂社は、人々と軍隊を結び付ける場でもあった。

3. 終わりに

日本が対外的に戦争を繰り返す中で戦死者は増え続け、招魂社（護国神社）の祭神は急増、毎年招魂祭が盛大に開催された。戦死者を慰霊することは国民の士気を維持するうえでとても重要なことだった。

一方、招魂祭はもともと郷土意識に根付いた招魂の場として、人々の娯楽と結びついており、多くの人たちは奉納行事を楽しんだ。九州日日新聞の1909(明治42)年5月6日の論説「招魂祭をオリンピアとする」は、その当時の空気をよく伝えている。

メディアは戦争遂行の国策を支えたわけだが、この論説の筆者は、軍国主義を煽って書いたというより、筆者も時代の空気を吸って、空気に酔って書いたというのがより実際に近い気がする。この筆者自身に、戦争一色に染まった人間の熱狂を感じるのだ。この記事を読んだ読者もまた、その熱を受け止めただろう。

井上富廣の日記を読んでも、招魂祭は一年のうちの大きな楽しみのひとつであり、招魂社はとても身近な存在だったことがわかる。招魂社で富廣が軍隊生活に思いを馳せたように、招魂社は軍隊と地域の人びとを結びつける場でもあった。

富廣の日記には、凱旋する六師団を出迎えようと熊本駅に人々が殺到し大混雑した様子や、子供たちがこぞって凱旋の旗行列をしたことなども記されている。

招魂社をひとつの土台として、国家神道が人々を呑み込み、総力戦に巻き込んでいくさまが見て取れる。国民もまた、戦争を支えた熱狂の歯車であった。招魂社、護国神社は、総力戦の強力なメディアだったと言えるだろう。

参考文献・資料

1. 『熊本県史 近代編第二』、1962、熊本県
2. 『熊本県史 近代編第三』、1963、熊本県
3. 『新熊本市史 史料編 第九巻』、1994、新熊本市史編纂委員会
4. 『花岡山招魂社陸軍墓地参道開鑿記』、1927、帝国在郷軍人会熊本市連合分会
5. 『熊本兵団戦史 太平洋戦争編』、1965、熊本兵団戦史編さん委員会
6. 村上重良『慰霊と招魂 靖国の思想』、1974、岩波書店
7. 井上佳子『戦時巡歴・わが祖父の声を聴く』、2018、弦書房
8. 熊本新聞 1878年

9. 九州日日新聞 1896年～1933年

10. 九州新聞 1930年～1934年